熊本六街道 日向往還

肥後国（熊本県）は九州の中央に位置し、古くから各地への主要交通路として、〝街道〟が整備されていた。それは、人や物の往来、文化の交流の証として、貴重な文化遺産であるといえる。

しかし車社会の現代、その姿は発達する道路に遮られ、消え去りつつある。熊本県では県内の主要街道を今に伝えようと、六年がかりで調査を進めてきた。このほど、

六街道
日向往還（至宮崎県）
豊後街道（至大分県）
薩摩街道（至鹿児島県）
豊前街道（至小倉）
人吉街道（至加久藤・横谷）
天草路（至苓北）
三水運
菊池川
球磨川
緑川

の調査が終了。多くの史料・写真が発掘され、人や物の往来、街道の変遷が浮き彫りにされた。

KAZEでは、この六街道を実際に辿り往時の道筋、現在の様子をシリーズで取り上げることにした。第一回目は日向往還〈新町札の辻―御船町―矢部町―蘇陽町馬見原（―高千穂―宮崎県延岡市）〉。

日向国（宮崎県）への道

YMCA中央センター前の公園。その道路際に白い標木がある。「史蹟元標跡」―加藤清正の時代から明治維新まで、肥後国の道路の起点とされた場所だ。日向往還はここを出発点に日向国（宮崎県）を目指す。南へ向かって新町、練兵町を下り、長六橋を渡る。

往還はここから御船町までほぼ現在の県道・国道に重なっていて、その道筋を辿ることができる。八勢の辺りから山の中を進み、国道に接したり離れたりしながら矢部町、清和村を抜け蘇陽町馬見原を経て日向国へと至る。

日向往還は、大きな道路や農道・町道として残っている部分も多く、史蹟や以前の道を訪ねやすい道程である。往還に沿って往時の面影を伝えるポイントをいくつか紹介する。

春竹本通り（熊本市春竹本町）

長六橋を渡り、産業道路に出会う五叉路で往還は国道三号線を離れる。そのまま琴平神社の方へ向かい、春竹小学校から萩原町へと続く「春竹本通り」に出る。この通りは、江戸時代ばかりでなく、大正時代まで荷馬車の往来が絶えず、宿屋や日用品を扱う店が軒を連ねて賑わった。鉄道が開通し、春竹駅（現南熊本駅）ができたために、その賑わいは駅前通りへと移ったが、春竹本通りの両側には今でも商店が並び、静かな佇まいの中に往時の面影を残している。

軍見坂（御船町萩尾）

国道四四五号線沿いに走る往還は、御船町滝川で県道二二一号線（御船吉無田線）へと左折し木倉に入る。途中、往還の道筋は細い農道へとそれるが、しばらくすると再び県道と合流する。ここから先、軍見坂という非常に勾配のきつい坂道。今は舗装もしてあり道幅も広いが、昔は幅半間（約九〇センチメートル）の藪中の道だった。その急な勾配と道の細さに、当時の人々も苦労してこの坂を越えたのだろう。西南戦争の際、妙見坂の戦いに敗れた薩軍が敗走、難渋したという伝承もうなずける。坂を登りつめた所に五里木跡のバス停がある。眼下には御船町から熊本市の街並が広がり、彼方には有明海がかすむ。まさに絶景である。

馬見原（蘇陽町馬見原）

馬見原は、中世の末頃までわずか四軒だけの小さな集落であったが、米の取引が盛んになるとともに、米その他の物資をこの往還を通って日向国へ運ぶ「馬見原駄賃」を中心に発展した。また、今も表通りに立ち並ぶ商店が、酒造りの町、宿場としての当時の雰囲気を漂わせている。

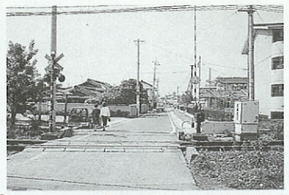
日向国への道は、舗装された道路端に立つ苔むした道標、現在の橋の横に架かる石橋などに往還の姿が残っていた。これらの史蹟を訪ねてみると、昔の生活、そこに暮らす人々や旅人の姿が浮かんでくるようだ。

（参考文献）『熊本県歴史の道調査―日向往還―』
昭和58年3月 熊本県教育委員会発行

※注
妙見坂の戦い

田原坂の激戦で御船まで後退した薩軍は、明治10年4月12日、官軍の激しい攻撃に押され敗走した。15日、熊本城救援のため御船にいた官軍は熊本へ進軍。薩軍はこの期に乗じて再び御船を無血占領した。20日、熊本東部の薩軍に対し官軍は総攻撃を開始し、御船方面では辺場山（白旗山）、妙見坂での攻撃が開始された。官軍はこれらの高地を占領、眼下の御船川付近の薩軍を猛射。多数の死者を出した薩軍は郡見坂（軍見坂）を通り、矢部道、木山道を矢部へ向かって敗走した。

❶ 元標「札の辻」跡


❷ 藤原踏切より春竹本通りを見る

❼ 軍見坂の頂上五里木跡からの眺め

❸ 田迎町一里木跡

❻ 軍見坂

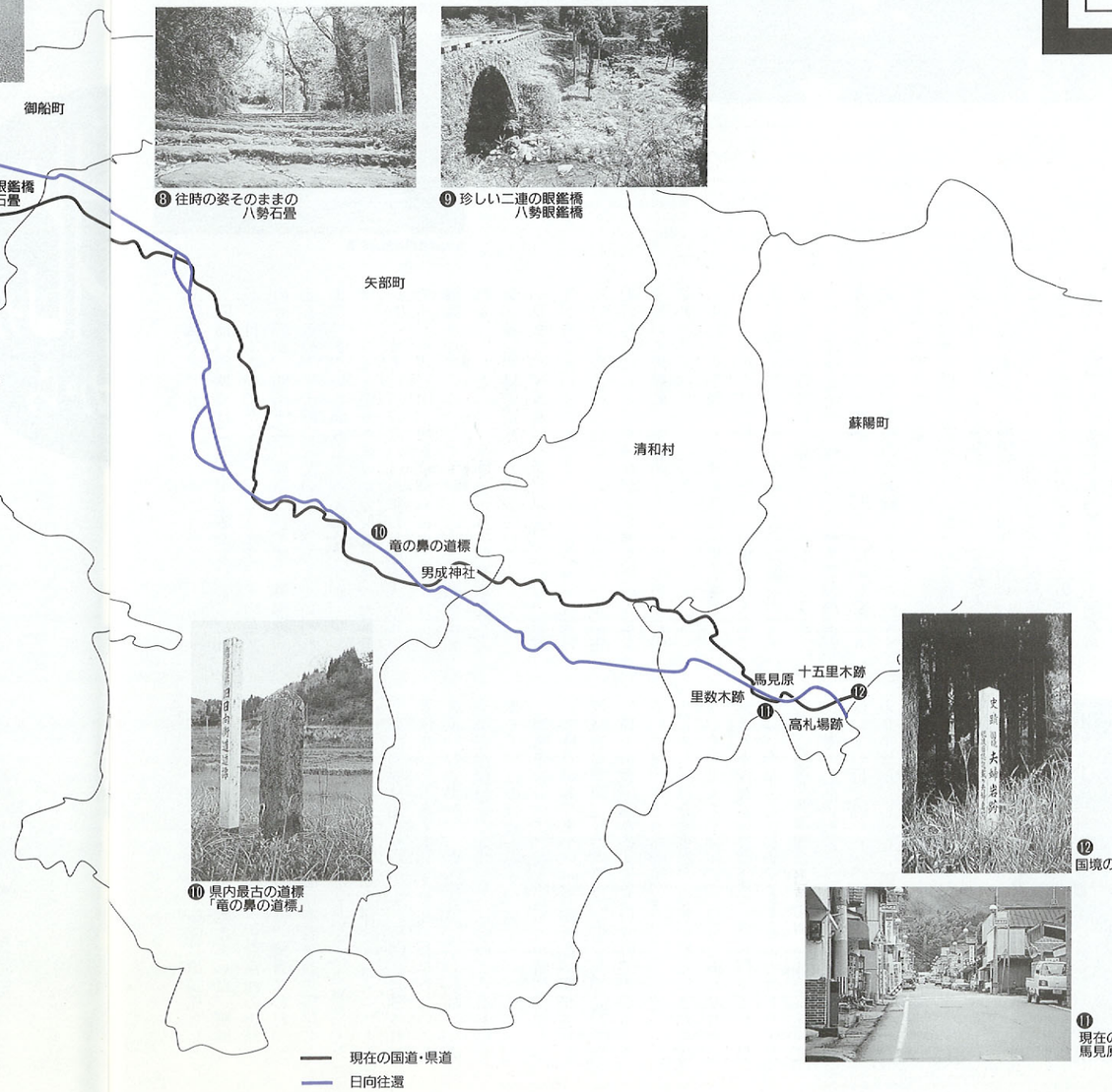
❹ 嘉島町中の瀬地蔵堂前の往還（二里木跡付近）

❺ 昔の面影を残す西木倉の往還

❽ 往時の姿そのままの八勢石畳

❾ 珍しい二連の眼鑑橋 八勢眼鑑橋

❿ 県内最古の道標「竜の鼻の道標」

⓬ 国境の夫婦岩跡

⓫ 現在の馬見原の町並